
銀時の過去。～過去からの挑戦～

八石マムミラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀時の過去。〜過去からの挑戦〜

【Nコード】

N5918D

【作者名】

八石مامミラー

【あらすじ】

銀さんは平凡に暮らしていたのだが、ポニテに興味を持っていた。桂、神楽、さっちゃんがポニテをしたりした。その後、みくるが現れた事で高校生時代を思い出した……

俺の過去、高校生のころだった。

初めて入るとき、宇宙人とか超能力者に関心を持っていた。

そして高校もどーせ、普通だろうと思ってた

「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしのところに来なさい。以上」

と、長くて真っ直ぐな黒い髪にカチューシャつけて、クラス全員の視線を傲然と受け止める顔はこの上なく整った目鼻立ち、意志の強そうな大きくて黒い目を異常に長いまつげが縁取り、薄桃色の唇を固く引き結んだ女が一人いた。

何の紆余曲折もなく単なるハルヒの思いつきにより、新しく発足するクラブの名は今ここに決定した。

SOS団。

世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団。

略してSOS団である。

そこ、笑う所？

と言っわけだ。

神楽「続き聞かせて」

新八「教えてよ、銀さん」

銀時「しょうがないなあ。パソコン部からパソコンを強奪する話を
するぞ!!!」

「コンピュータも欲しいところね」

SOS団の設立を宣言して以来、長テーブルとパイプ椅子いすそれに
本棚ほんだなくらいしかなかった文芸部の部室にはやたらと物が増え始めた。
どこから持ってきたのか、移動式のハンガーラックが部室の片隅かたすみ
に設置され、給湯ポットと急須きゅうす、人数分の湯飲みも常備、今どきM
Dも付いていないCDラジカセに一層いっしょうしかない冷蔵庫、カセットコ
ンロ、土鍋つちかま、ヤカン、数々の食器は何だろうか、ここで暮らすつも
りなのだろうか。

今、ハルヒはどっかの教室からガメてきた勉強机の上であぐらを
かいて腕うでを組んでいた。その机にはあるうことが「団長」とマジッ
クで書かれた三角錐さんかくすいまで立っている。

「この情報化時代にパソコンの一つもないなんて、許し難がたいことだ
わ」

誰だれを許さないつもりなのか。

一応メンバーは揃そろっていた。相も変わらず長門有希は定位置で土
星のマイナー衛星が落ちたとかどうしたとかいうタイトルのハード
カバーを読みふけり、来なくてもいいのに生真面目きまじめにもちゃんと言
って来た朝比奈みくるさんは所在なげにパイプ椅子に腰掛かけている。
ハルヒは机から飛び降りると、俺に向かって実にいやあな感じの
する笑いを投げかけた。

「と言うわけで、調達に行くわよ」

狩猟区しゅりょうくへ鹿撃ちしかうに行くハンターの目でハルヒは言った。

「調達つて、パソコンを？ どこでだよ。電気屋おそでも襲おそつつもりか
「まさか。もつと手近なところよ」

ついてきなさい、と命令された俺と朝比奈さんを引き連れてハル
ヒが向かった先は、二軒隣にんげんりのコンピューター研究部だった。

なるほど。

「これ持ってて」

そう言っただけにインスタントカメラを渡す。

「いいこと？ 作戦を言うから、その通りにしてよ。タイミングを逃さないように」

俺に身を屈めさせてハルヒは耳元でその「作戦」とやらをこじよごじよと呟いた。

「ああん？ そんな無茶苦茶な」

「いいのよ」

お前はいいかもしれんが。俺は不思議そうにこつちを見ている朝比奈さんを一瞥し、アイコンタクトを図った。

とつとと帰ったほうがいいですよ。

目をパチパチさせている俺を朝比奈さんは怪訝な顔で見上げ、いかなる理屈か、頬を赤らめた。だめだ、通じていない。

そんなことをしているうちにハルヒは平気な顔でコンピュータ研究部のドアをノックもなしに開いた。

「こんちわー！ パソコン一式、いただきにきましたー！」

間取りは同じだが、こちらの部屋はなかなか手狭だった。等間隔で並んだテーブルには何台ものディスプレイとタワー型の本体が載っていて、冷却ファンの回る低い音が室内の空気を振動させている。

席についてキーボードをカチャカチャと叩いていた四人の男子生徒、何事かと身を乗り出して入り口に立ちふさがるハルヒを凝視していた。

「部長は誰？」

笑いつつも横柄にハルヒが言い、一人が立ち上がって答えた。

「僕だけど、何の用？」

「用ならさつき言ったでしょ。一台でいいから、パソコンちょうだい」

コンピュータ研究部部长、名も知れぬ上級生は「何言っただ、

こいつ」という表情で首を振った。

「ダメダメ。このパソコンはね、予算だけじゃ足りないから部員の私費を積み立ててようやく買ったものばかりなんだ。くれと言われてあげるほどウチは機材に恵まれていない」

「いいじゃないの一個くらい。こんなにあるんだし」

「あのねえ……ところでキミたち誰？」

「SOS団団長、涼宮ハルヒ。この二人はあたしの部下その一と二」
言うにことかいて部下はないだろう。

「SOS団の名において命じます。四の五の言わずに一台よこせ」

「キミたちが何者かは解らないけど、ダメなもんはダメ。自分たちで買えばいいだろ」

「そこまで言うのならこっちにも考えがあるわよ」

ハルヒの瞳が不適な光を放つ。よくない兆候である。

ぼんやり立っていた朝比奈さんの背を押してハルヒは部長へと歩み寄り、いきなりそいつの手首を握りしめたかと思うと、電光石火の早業で部長の掌を朝比奈さんの胸に押しつけた。

「ふぎゃあー！」

「うわっ！」

パシヤリ。

二種類の悲鳴をBGMに聞きながら俺はインスタントカメラのシャッターを切った。

逃げようとする朝比奈さんを押さえつけ、ハルヒは右手につかんだ部長氏の手でぐりぐりと小柄な彼女の胸をまさぐった。

「キョン、もう一枚撮って」

不意ながら俺はシャッターボタンを押すのだった。すまない、朝比奈さん。と、名も知らぬ部長。朝比奈さんのスカートの中に突っ込まれる寸前に部長はやっと手を振りほどいて跳びすさった。

「何をするんだあ！」

紅潮したその顔面の前で、ハルヒは優雅に指を振るった。

「ちちち。あんたのセクハラ現場はバッチリ撮らせてもらったわ。

この写真を学校中にはらまかれたくなかったら、とつととパソコンをよこしなさい」

「そんなバカな！」

口角泡を飛ばして抗議する部長。その気持ちはよく解る。

「キミが無理矢理やらせたんじゃないか！ 僕は無実だ！」

「いったい何人があんたの言葉に耳を貸すかしらねえ」

見ると朝比奈さんは床にへたり込んでいた。驚きを通り越してもはや虚脱の境地である。

なおも部長は抗弁する。

「ここにいる部員たちが証人になってくれる！ それは僕の意味じゃない！」

啞然と大口を空けて石化していた三人のコンピュータ研部員たちが、我に返ったようにうなずいた。

「そつだあ」

「部長は悪くないぞお」

しかしそんな気の抜けたシュプレヒコールが通用するハルヒではなかった。

「部員全員がグルになってこのコを輪姦したんだって言いふらしてやるっ！」

俺と朝比奈さんを含む全員の顔が青ざめた。いくらなんでもそれはないだろう。

「すすす涼宮さんっ………！」

足にすがりつく朝比奈さんの手を軽く蹴飛ばして、ハルヒは傲然と胸を反らした。

「どうなの、よこすの、よこさないの！」

赤から青へ目まぐるしく変色していた部長の顔はとうとう土気色になった。

ついに彼は陥落した。

「好きなものを持って行ってくれ………」

倒れ込むように椅子に背を投げ出した部長に他の部員たちが駆け

寄った。

「部長！」

「しつかりしてください！」

「気を確かに！」

糸の切れたマリオネットの動きで部長は首をうなだれた。ハルヒの片棒をかついでいる俺ではあるのだが、同情を禁じ得ない。

「最新機種はどれ？」

どこまでも冷徹な女である。

「なんでそんなことを教えなくちゃいけないんだよ」

怒る部員の言葉もなんのその、ハルヒは無言で俺が持つカメラを指さした。

「くそ！ それだよ！」

そいつが指したタワー型のメーカー名と型番を覗き込みつつハルヒはスカートのポケットから紙切れを取り出した。

「昨日、パソコンショップに寄って店員にここ最近出た機種を一覧にしてもらったのよねえ。これには載ってないみたいだけど？」

あまりの周到さに慄然《りつぜん》とするね。

ハルヒはテーブルをぬって確認して回り、その中の一台を指名した。

「これちょうだい」

「待ってくれ！ それは先月購入したばかりの……！」

「カメラカメラ」

「……持ってけ！ 泥棒！」

まさしく泥棒だ。返す言葉もない。

ハルヒの要求はとどまるところを知らない。各ケーブルを引っこ抜かせたハルヒはディスプレイから何からいつさいがっさいを文芸部室に運ばせたあげく配線し直すように求め、さらにインターネットを使用できるようにLANケーブルを二つの部屋の間に引かせ、ついで学校のドメインからネットに接続できるようにすることを申しつけ、そのすべてをコンピュータ研部員にやらせた。盗人猛々《

ぬすつとたけだけ《しつとはじつとだるじつ》。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5918d/>

銀時の過去。～過去からの挑戦～

2010年10月8日10時31分発行